

幼・少年期の自然体験と感性の関わり

○ 若杉純子 川村協平 永吉英記 小林恵里香
 (山梨大学研究生) (山梨大学) (山梨大学大学院) (山梨幼児野外教育研究会)

<はじめに>

身近な自然が不足してきたことや知識中心の教育等が子どもたちの経験不足を助長し、様々な弊害をもたらしてきている。また、子どもの頃からの様々な経験不足が未熟成につながるという指摘もされている。

感性とは、「価値あるものに気づく感覚」(片岡, 1990)である。様々な刺激に対してどのように気づき、どのようにはたらきかけるかということは直接体験の中で、実感として刺激を受け取ったときに生まれるものだと思われる。

現代の子どもたちに希薄がちな夢見る心や希望を持つこと、イメージする力、想像し創造する力、意欲を持ち自主的、能動的にまわりのものに対して価値を見出す力、そして実践する力などこれらはすべて感性の働きに起因している。感性は生活していく中での諸能力の源ではないかと思われる。それ故人間形成にも大きく関わるのではないかと考えられる。

そこで本研究では、子どもの頃の自然体験はその後感性にどのように影響するのか、世代別に調査を行い、比較検討した。

<研究方法>

調査は、1996年9月～10月に実施した。対象は、山梨県内の幼稚園年長児、小学生、中学生、高校生、大学生、成人(20代～50代)からそれぞれ100名、計1000名であった。調査内容は、a)精神発達、b)感性、c)体験に関するものであり、3種類の質問紙を用いて実施した。「精神発達測定尺度」は関連文献より項目を抽出し、「運動的発達」「知的発達」「社会性の発達」「情緒性の発達」の4つの側面から構成した。「感性測定尺度」は針ヶ谷(1994)によって作成されたものを修正して用いた。この尺度は「事象の背景・つながり」「自然」「人間」「生命」の4つの因子から構成されている。「体験調査」に関しては、主に山田(1995)の文献から体験の項目を抽出した。その中で体験を「野外活動体験」「動物体験」「草体験」「木体験」「土体験」「石体験」「火体験」「水体験」「その他の情緒的体験」に分類して作成し、0～15歳の時に体験した回数について質問した。

<結果及び考察>

1) 尺度得点の比較

世代比較でみると、「感性」および「体験」は年齢とともに上昇傾向を示した。(体験の変化を図1に示す。)

「体験」に関しては、現在の幼児・小学生がこれから体験していくことを考慮に入れても、30代～50代の人々の子ども時代に比べ、現在の子どもたちの体験度は少ないことが示されている。幼児・小学生と30～50代の人々では、キャンプ経験などの野外活動体験にはあまり違いはみられないが、例えば「木に登って遠くを眺める」や「星をゆっくり眺める」など身近な自然での体験では30代～50代の人々の方が多く、また一つの体験における回数が幼児・小学生に比べると多いことが要因となっていると思われる。

「感性」においては、その測定尺度の特性から自然認識の発達に影響されることが考えられ、年齢とともに上昇したと思われる。因子別にみても「事象の背景・つながり」因子は幼児から成人まで徐々に上昇傾向にあった。また、年齢が上がるにつれて自然や生命に対する捉え方や自

分の子ども時代の体験に対して肯定的になると思われ、それが「感性」及び「体験」の上昇につながっていると考えられる。

2) 体験と精神発達、感性の関わり

「体験-精神発達」の相関においては、幼児から中学生の各群において有意な相関がみられた。幼児期から青年期的人格形成期において、「体験」と「精神発達」は大きな関わりを持っていることが考えられる。様々な体験をするということは、いろいろなところに出かけ、いろいろな場面や人々に出会うということであり、そのような中で自己発達や社会性の育成がなされるのではないかとと思われる。

「体験-感性」の相関においては、幼児から50代のすべての群において有意な相関がみられ、幼児～20代においては特に相関が高かった。(幼児～小学生における体験と感性の相関図を図2に示す。)このことから幼・少年期の「体験」の多い人ほど「感性」も高いということ、また「体験」と「感性」には深い関わりがあることがうかがえる。体験の種類と感性およびその因子の関わりをみると、「野外活動体験」と「人間」および「自然」因子、「木体験」「水体験」と「生命」「自然」において高い相関がみられた。

<まとめ>

山田(1989)は「自然を五感で知覚したもので、後の事物・事象の認識に影響を及ぼす体験」を「原体験」と呼んでいる。五感を伴う原体験はものを認識する上での基本であると思われる。多様な自然の中での様々な原体験は子どもたちに自然や人間に対する直接的な興味を呼び起こし、感動する心を養い、それは生きていく上で必要な力の源となるのではないかとと思われる。

本研究から自然体験と感性には深い関わりがあることが明らかになった。また、幼・少年期の体験度は大人になってからも感性に影響を与えていると思われ、小さい頃からの体験が、自然や人間、生命に対する価値観の形成に関わっていると考えられる。様々な直接体験を積み重ねていくことによって、感性は磨かれていくのではないだろうか。

今後は、子どもの頃の体験度によって、それ以後の自然体験度に変化がみられるか、またそれと感性にはどのような関わりがあるかなどについても考察していく予定である。

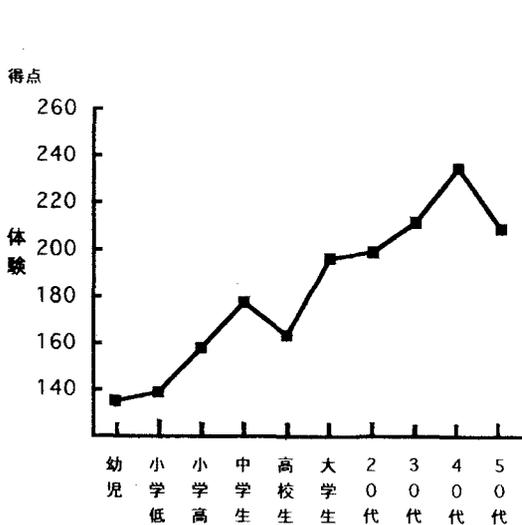


図1 体験得点の世代比較

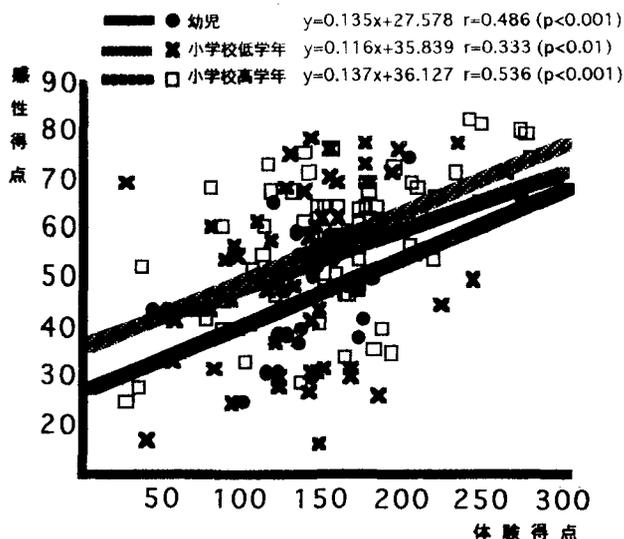


図2 体験と感性の関わり (幼児～小学校高学年)